

村越真のオリエンテリング日誌

Fast life, slow life

「先生は人の3倍くらい働いているので、せいぜい2.5倍くらいに抑えて、先生からみたらだらけている、くらの生活をしてください」精神科医からも、スローライフを勧められつつ、上海、香港、盛りだくさんの春。

2月12日

早稲田大会はノンシード。シード選手を蹴散らしてやると思い込むが、2分後のシード寺垣内にすでに4番で追いつかれる。確かに前半ルートに迷うところがあったから、そのミスなのだろう。しばらく併走するが、振り切れる気配もない。これよりもさらにショックだったのは、8分後の善徳が現れたことだ。柔らかい土質で傾斜あるトレインに、筋力が対応できていないことは分かっている。しかし、それ以上に課題がありそうだ。全日本までの6週間の過ごし方を考えなおそう。

2月18日

9月に開催する作手トレイルランニング大会の準備で、許田を連れて作手へ。2004年の世界選手権選考会が終わって以来、トレイルランという広い世界に「家出状態」(本人談)の許田は、今やその世界では頂点の一つ、山岳耐久レースで4位になる実力者だ。「家出息子」の比喻を借りるなら「都会に訪ねてみたら、立派になって驚いた」といったところだ。

下見したのは、鬼久保ふれあい広場から三河湖までの約23kmのコース。前半の巴山周辺は、地図調査の夕方何度もジョグして気に入っていたコースだが、後半黒坂の地図が切れるあたりから三河湖までのルートに検討の余地があった。何度か藪にはまって行き止まりの繰り返しの後、この大会のために残されていたのではないかと思えるような、おあつらえ向きのいにしえの山道を見つけた。残念ながら今年は07の前日だが、チャンスがあったら是非一度は走ってみてほしいコースだ。

2月21日

卓球を専門とする同僚の研究の手伝いで、24日まで上海に出張した。中国は現在女子世界ランキングで40人中30人も占めている卓球王国である。特に上海は昔からその



いにしえの山里の暮らしを感じさせる作手のトレイル。WOCの地図調査の合間を縫ってよく走った作手の道は、トレイルランニングにも最適なエリアだった。

中心的な役割を果たし、数年前に世界選手権も開かれた場所だ。その上海に小学校から「英才教育」をしているところがある。それを取材し、スポーツエリート早期教育における親の役割の実態を調査するものだった。2月は思ったよりも忙しく、体調も十分でなかった。直前には気乗りがしなかったのだが、時間とエネルギーの投資を補ってあまりある収穫であった。

第一に、先入観が覆されたこと。中国と言えば日本より貧しく、また儒教の伝統で、指導者と選手の関係も厳しそうだった。ところがいづれも全く見当はずれ。貧富という点で言えば、来た親の中には年収1億以上の人もいた。こちらの方がむしろ貧しい。

第二に、指導のモチベーションがあがったこと。その学校のコーチは世界チャンピオンになった後日本に帰化した小山ちれを育てた人だ。60歳を過ぎた今でも、周囲に目配りをしながら情熱的だが包容力豊かに子どもたちの練習相手をしていた。この環境をオリエンテリングの合宿で再現するためにはどうしたらいいのだろうか？そんなことを考えさせてくれる練習風景だった。

同行したのは、学内の同僚と日本卓球協会の強化副本部長の前原さんだった。前原さんは、学生チャンピオン、日本チャンピオンになるとともに、現在は協会の実質的な強化の責任者であり、また将来はさらに協会運営の中枢に関わる立場の人だ。オリ

エンテリングより大きな組織で、同じような境遇にある彼の振る舞いから学ぶことは多かった。現在の自分にとってのよきメンターに出会えた。帰国後、自著とオリエンテリングを紹介するDVDを送ったところ、丁寧にも、自著に銘を入れて送ってくれた。「正念場を常の心で」とある。おそらくそれは彼自身が最も感じていることなのだろうが、周囲と自分の変化におたついている自分にとっても、肝に銘ずべき言葉だ。



日本卓球協会強化副本部長の前原さんと、上海にて。

3月5日

専務理事として、初めてのJOA総会。朝から緊張しているのか、6時には目覚めてしまう。株主総会を控える社長っていうのは、こんな気分なのだろう。前回理事会で問題となった、スキー0の世界選手権をやるのかやらないのかという議論も、結論のでないまま総会後に持ち越しとなった。総会では、いくつかの指摘は出たものの、これまでの総会で見られたような不毛でけんか腰のやりとりはなかった。現在のJOAの処務の進め方について、会員からは概ね好意的に受け取られているのだろう。

決まり切った予算や事業計画の時間は最小限に抑えて、今後の組織強化やそのターゲットについて、橘さんと村越で40分程度のプレゼンをした。その中で、中期的な目標として、「登録人口5,000人、全ての協会員が3年間のうち、一度は公認大会を行なう、半数の協会員である22都道府県で一般アウトドア活動者向けの大会を開催する」などいくつかの数値目標を提示したが、それについての意見は特に聞かれなかった。受け止めてもらえたのだろうか？無関心なのだろうか？

総会後理事会を再開し、スキー0世界選手権開催の是非についての議論を続ける。もっとも事情を知った信原氏がないこともあって、結局諾否いずれにしても積極的な意見を述べる人が、なかったことは残念であった。これも結局総務会で信原氏からヒアリングをしながら、結論をまとめ、郵送にて稟議するという結論になった。そんなこんなで疲れて、やや気分も滅入る。気分転換に、さっさと帰って走る

3月6日

時々鬱々とした気分になるのは、昨日の疲労感が残っているのか、それとも新しい出会いに対する興奮に、神経系が誤った信号を出しているせいなのだろうか。関西大学で「道迷い」の危機管理について研究している青山教授の被験者となるため大阪にやってきたのだが、せっかくなので前日夕食をともした。彼が、屋外での読図（現在地把握）の研究をしていることは知っていたが、「岳人」の1月号の特集記事でも被験者募集を出していたので、チャンスと思い、こちらからアプローチしたのだ。

翌日は、神戸市の福知山線「道場」をスタートし、9時から夕方16時まで山の中を歩き続けた。時折青山さんが立ち止まっては「ここはどこかを地図に書き込んでください」という、オリエンティアにとっては慣れた課題だ。唯一面倒なのが、立ち止まるまで地図を見てはあげないという条件だったこと。おしゃべりしながら歩いて、なおかつ周囲の状況を覚えておいて、地図を見た瞬間にマッチングするという課題は



20年来の4位入賞を果たした静大男子チーム。写真は個人戦の時のもの。中央の櫻木が個人戦でも5位に入る大活躍。

ややつらい。それでも、「オリエンティア村越、恐るべし」のとりあえずの評価をもらった。興味のある方は是非、青山さんに連絡をとるとよいだろう。

3月11日

ゼミの院生がスポーツ選手を対象とした質問紙調査をしていること、やはりゼミ生の中島あかねと静大男子の櫻木に入賞の可能性があったので、土曜日帰りインカレ観戦に出かける。中島は、3週間前にひいたインフルエンザの影響で、この2週間の前半はほとんど何も食べられず、ようやくこの1週間で軽いものが口のできる程度だった。二人とも予選では2位だったが、この状況の中島には2本のレースは厳しかった。1年のころから期待されてきた櫻木は、4年にして初入賞。リレーでも、静大男子は約20年ぶりの4位入賞。往復一人運転で、非常に疲れた。翌日は午前の試験監督のあと、漠然とした不調感が極まり、走ることもできずに夕方2時間も寝て、なおかつ普通に就寝。

3月13日

今日も作手復役の予定だったが、さすがに車を運転していく気になれず、新幹線で学連総会に向かう。30分ほど時間をもらって、現在のJOAの状況について説明後、質疑を行なう。JOAという組織の存在は当然みな知っているが、それがどんな組織で、どう運営されているかを知らないオリエンティアは少なくないだろう。まして学生には全く関係ない話しかもしれない。オリエンティアが漸減している現在、JOAと学連両者が様々な領域で協力しあい、普及を再構築する必要があるだろう。そんな意味で

のプレゼンに、思った以上の質疑があり、来た甲斐を感じた。

その後は、どっぴり疲れ、頭重く気力が薄れる。総会で会った山口たちと、近所に住むいとぎょう（伊藤恭子）を訪ねる。その後は、講習会の宿に移動。夕方ゆっくり走ってみるが、気力がなくても、ゆっくりなら走れるものだ。体の切れは悪くない。講習会では1時間ほど話しをして、帰宅。

3月17日

京葉OLCの早野さんの依頼で、プロジェクトマネジメント学会の招待講演を行なう。確かに世界選手権開催は大きなプロジェクトマネジメントだが、むしろあれはマネージメントという意味では失敗に近い。

「コーチとか選手としての経験でよいので・・・」ということでお引き受け、当日も自分がいかに選手として成功したか。コーチングの中で目標やそれに向けての具体的なアクションをどう組織したかについて話す。こういう講演の質問というのはとってつけたようなものが多いのだが、この日はいくつか鋭い質問を受け、自分自身が刺激を受けた講演だった。

その日の昼食は、学芸大付属>東大>筑波大学院（しかもスポーツ）という珍しい経歴が奇しくも一致する20年来の後輩とデート。お互い40歳代も半ばになり、「最近鬱々する気分になることが多いよね」という湿っぽい話になりがちだ。「じゃあ、話題変えようか」と、最近地図に関するNPOを設立した話をする、彼女は「それ絶対将来性あるわよ。環境教育だって、今はすごく情緒的でしょ。客観的に考えていく時には地図という媒体が絶対必要になるんだし」と、僕が考えたこともない視点を提供してくれた。

彼女は最近絵を習っているらしく、山の絵をうまく描けると、それを等高線で正確に描ける人はどこが違うのだろうかという話しも、新鮮だった。両者は、対象となる山を正確に把握していることは間違いないだとすれば、表象（イメージ）のどこからのレベルで同一のものを持っているはずだ。しかし、もちろん他人に見える表現は全く違う。単に表現する記号だけの違いなのだろうか。内的な表象も途中の段階で違っているのだろうか。そんなことを考える、刺激的なデートだった。

3月18-19日

全日本を控えて、高橋、田島、柳下の阿闍梨有志で富士合宿。サマーチャレンジのコースを利用して、最初はゆっくり、最後はチェイシングでどこまで追い込んで走れるかを確認する。結局チェイシングのトレーニングは他のメンバーと合流できず、一人でやることになる。気分的には優れなかったものの、思いの外体の切れはよく、スピードに乗って走ることができた。

トレーニングもさることながら、ワールドカップ以来のつきあいのクリッククラックでの宿泊はリフレッシュになる。夜はトランプ大会だが、さすがに皆アスリートだけあって、競争は大好きだ。大貧民の得点をハンディーとして、翌日のインターハイ併設レースも含めた「複合競技」にしようということになった。

ちょうどよいことに僕がトップで高橋がビリ、その差は19点なので、1点5秒のハンディー。女性の田島利佳は29点なので、1点1分で18分のハンディ。いくらなんでも6kmのコースで18分のハンディーでは田島有利かと思われたが、ふたを開けてみたら、村越、高橋、田島は1分程度の大接戦。

この日はなぜか調子もよく、生タイムでも高橋を1秒抑えて、トップとなった。NTメンバーがいるなかで優勝した大会っていつ以来だろう？この結果が全日本につながることは、とても思えないが、ミドルなら十分戦える、という感触を得る。

3月24日

昨日は謝恩会で車を置いて帰ったので、自転車で通勤。全日本直前なので、ゆっくり気持ちよいペースで走る。正午ごろ不調を感じる。緊張感が不快感として感じられているのかもしれない。首のこりもひどかったが、全日本前ということで奮発したマッサージで、身体も気分も楽になる。

3月25日

午前は研修、午後はO-forumを開催し、夕方スキー0のミーティングに顔を出して、宿舎へ。宿舎規定の夕食時刻はとうに過ぎていたが、あまりに肩こりがひどく、頭痛もするので、ジョグ。少し楽になる。



香港でのコントローリングのひとつ。ランタオ島のトレインにて。これも20年来の友人パトリックと。香港のオリエンテーリングは、何年たっても彼が支えているようなものだ。APOCでも国内コントローラを務めている。

3月26日

「村越、お酒落じゃん。」これが全日本7位に対する20年来の友人上田の評である。目標として掲げた6位にはなれなかったし、トップとは5分差で、がんばって5位がせいぜいだ。「ロング」のコンセプトをプランナーから強く打ち出されたことに、過度に反応してはいけなかつつ、それを強く意識しすぎてしまった。95分のレースをしなければいけない、そのためには今の自分にはスピードが出せないと思ってしまったのだ。結果としてスピード感のない、楽なレースになってしまった。ミスはなかったのだから、それで7位にしかなれないのは、喜ばしいこととも言えるのだが。

3月29日

年末に開かれるAPOCはワールドランキングイベントも兼ねている。そのため近隣の日本に住む僕がコントローラに選ばれた。この日はそのコントローリングのため、中部国際空港から香港へ移動。夜屋川にもかかわらず迎えに来てくれたパトリックと宿舎についたのが日本時間なら真夜中を回っていた。

翌日は、一日中トレインのチェックで歩き回る。夜はどうする？というので、できれば走りたいということ、夕方スコートのトレーニングがあるという。香港島にある競馬場の中を活用した運動競技場でのトレーニングに参加。昼間日差しの強い中を歩き回り、夜もそこそこにトレーニングをこな

して、ここ半年なかった健全な身体の疲労感に包まれた。脚の調子は悪くない。

10年ぶりの香港でのAPOCだが、今回もオープントレインを中心とした、香港らしいオリエンテーリングが楽しめる。クリスマスシーズンなので、航空券は取りにくくやや高いが、早めに押えれば問題ないはずだ。ショッピングや観光などプラスも充実した本大会に是非！

(村越 真)